あの時を忘れない

大和町立小野小学校　六年　畑中　彩希

東日本大震災から四年が経ちました。あの時一年生だった私はもう六年生です。

震災の時とその後数日間、私の家ではプロパンガスは使えましたが、水は出ない、電気は使えないという状態でした。人は生活していく上でそのうちの一つでも欠けてしまったら本当に不便だと身をもって経験した数日間でもありました。と同時に、家族みんなで生きていられることが本当に幸せなことなのだと四年たった今も、この先ずっと忘れてはいけないと思います。

水道と電気が使えるようになるまでの数日間のことは今でもよく覚えています。日中は私が通っている小学校にポンプ車が来てくれて家族みんなで飲用水をもらう為に並んだり、家にいるときはお姉ちゃんとよく歌をうたいました。私が知っている曲をピアノで弾くと、お父さんとお母さんは口ずさみました。

ガソリンスタンドに並んで待っている間は車の中でお母さんが、私とお姉ちゃんに本を読んでくれました。私は本が好きなのは、もしかしたらその時からなのかもしれません。夜には、ローソクのあかりで過ごし、みんなでいっぱい話をしました。そしてよく星空を見て、早く朝になればいいなと思っていました。

私の今の生活は何不自由なく幸せだと思います。でも人は幸せになると何かを忘れたり時にはわがままになってしまいます。私も毎日の中で楽しいことばかりではなく嫌なことがあると、苦しくなってそこから逃げたくなることもあるからです。でもそこからまたそういうことにぶつかってしまった時には人は一人では生きていけないし、助け合って生きていかなければいけないことや感謝の気持ちを持つこと、空を見上げた時にきれいだなと思える心を大切にしていきたいです。

「一本の桜の木」

大郷町立大郷小学校　六年　阿部　光咲

私がまだ小学一年生だった頃、東松島市立浜市小学校という学校にいました。海の近くで、校庭には一本の桜の木がありました。その桜の木は、毎年春にはとてもきれいな花が咲いて、友達と遊んだり花見を楽しんだりしていました。三月十一日。突然、とても強い地震が学校を襲いました。まだ一年生だった私には、立っていることすらままならないほど大きな地震でした。教室では物がたくさん落ちてきて、担任の先生が、

「机の下にもぐりなさい。」

とあわてて言い、みんな一斉に机の下にもぐりました。ゆれが収まった後、津波の危険があるので、私たちは急いで三階の音楽室に向かいました。そこにはたくさんの住民の人たちがいて、私はびっくりしながら満員の音楽室に入りました。それから間もなく、校庭の松の木も越えるほどの津波が学校に押し寄せてきたのです。私は、このまま流されてしまうのではないかと、とても怖くなりました。今でもその恐ろしい光景は目に焼き付いて離れません。クラスメートの中には、怖くておなかが痛くなったり、泣いていたりする人もいました。私は怖さをまぎらわすために友達とジャンケンやおしゃべりをして過ごしました。そうしていないと怖くてどうにかなってしまいそうでした。その夜は、一晩学校で過ごしました。とても寒い日だったので、私たちはカーテンをふとん代わりにして寝ました。寒さで凍えそうでした。

翌日、ようやく父が迎えに来てくれました。私は父の姿を見て本当に安心しました。料理人の父は、おにぎりを作ってきてくれて、みんなに分けていました。あの時のおにぎりの味は、今でもよく覚えています。翌日には校庭の水はひいていました。私が東日本大震災を通して学んだことは、見知らぬ人同士でも、困ったときは助け合うということです。食料がない時や大きながれきが押し寄せてきた時、みんなで助け合っていかなければ、生きていくことはできません。

私には夢があります。それは、看護師になることです。私は自分が人を助けることができるかまだ分かりませんが、たとえ小さな事でも、人を助けるやりがいのある仕事につきたいと思います。こう思えるのは、震災の時、自分以外の人のために必死になって頑張る人たちを見たからです。そしてあの時、自分自身が助けてもらい、心から嬉しかったからです。

私は今、大郷小学校で新しい友達もでき、バスケットボールを頑張っています。年々あの震災のことは薄れていく感じがしますが、私のもう一つの母校である浜市小学校には、あの桜の木が残っています。桜の木は、津波に勝った力強い木でした。私も、この桜の木のように、人を勇気づけられるような、困難に負けない強い人になりたいです。

ぼくのふるさと富岡

富谷町立富ケ丘小学校　六年　山田　碩甫

ぼくが、ふるさと富岡のことを思い出すときに、いつも浮かんでくるのは、なつかしいかつての富岡の風景です。ぼくは田んぼと川が近くにあり、自然に囲まれたところで育ちました。そこにはお年よりがたくさんいましたが、小さい頃は友達と近くの公園の遊具で遊んだものです。ぼくの家の庭に親せきたちが集まり、竹を組んで流しそうめんをしたことをなつかしく覚えています。

そんな平和なふるさと富岡での生活が一変したのが、あの三月十一日の大震災からです。そのときぼくは一年生でした。学校から帰って家にいたら、大きな音とともに急に大地がゆれ、部屋のたなから物が落ちたり、窓ガラスがガタガタ鳴ったりしました。ぼくは祖母といっしょでしたがとてもこわい思いでした。地震が続いて不安なところに雨が降ってきてよけいに不安がつのりました。無性に涙が出て止まりませんでした。帰ってきた母の姿を見つけたときに、やっと不安が小さくなりました。

地震のゆれはくり返しおそってきました。夜になってもまだ地震が続いていたので、こわさのあまりヘルメットをしながら寝ました。

大地震の次の日の朝早くから、町の防災無線が報せていました。発電所の事故のおそれがあるので、避難するようにという放送でした。この放送が流れ、ここは危険なんだと心配になりました。

両親が相談して、母方の祖父母が住む宮城の富谷町に移ることを決めました。ふるさと富岡を出るなんて、なんだか実感がわきませんでした。

とうとう富岡を離れるときがきました。仲のよい友達と別れるのがとてもいやでした。富谷町立富ケ丘小学校に転校しました。最初、知らない人ばかりで、なかなか学校になじめませんでした。それ以上に、家族が離ればなれにならざるをえなかったのが、つらかったです。父はぼく達家族のために今も福島で働いています。上の兄は進学のために福島の別のところで寄宿舎生活をしています。そして富谷町では母と下の兄とぼく。一つの家族が三か所にばらばらになって暮らしています。

今は学校に慣れ友達もたくさんできましたが、いつも家族を思い出します。六年生になったぼくは、修学旅行で会津若松に行きました。会津若松は前に行ったことがありなつかしい。けれど同じ福島でもまったく違うと思いました。今の会津若松と昔の富岡はどちらも落ち着く町です。一度でも富岡に帰りたいと強く思いました。また、家族と親せきとで富岡の家に集まりたいです。落ち着いた富岡の景色をながめて、昔のことをじっくりと思い出したいです。

富岡に来てから学校の先生、友達、近所の人、野球の仲間などたくさんの人と出会いました。ぼくと家族が元気にくらすことができるのは、これらの出会いのおかげだと思います。ぼくのふるさとは富岡ですが、それ以上に今は、富谷が大好きです。

震災から今日までをふり返って

大衡村立大衡小学校　六年　小林　こころ

二〇一一年、三月十一日、午後二時四十六分、大きな地震が起きました。その時、私は友達といっしょに学校の階段にいました。大きなゆれで立っていられず、階段の途中に座りこんでしまいました。先生の指示で校庭に逃げ、家の人がむかえに来るのを待ちました。家に大きなひ害はありませんでしたが、電気も水道も使えなくなってしまい、不便でした。夕飯を食べる時は、ろうそくの火で手元を照らしました。洗濯はおばあさんが洗濯板を使って、おふろに残っていた水でしてくれました。飲み水は、おばあさんとお兄ちゃんが山奥までくみに行きました。電気や水道が使えないと、家族みんなが大変なのだと分かりました。

でも、おさななじみの友達は、もっともっと大変だったことを後で知りました。小さいころ一緒に遊んでいたその友達の家は、津波で流されてしまったそうです。友達は学校の屋上にひなんして、その後ヘリコプターでべつな所まで運ばれたそうです。命が助かって本当に良かったと思いました。でも、自分の家も学校も津波のひ害にあい、大切にしていた物もなくしてしまい、かわいそうだなと思いました。

一年以上たってから、その友達の新しい家が建ったと聞き、お母さんと一緒に行って見ることにしました。新しい家は、前とは違う所に建っていました。安全な所にピカピカな新しい家を建てられて良かったなあと思いました。でも、少しはなれた所には、こわれたままの家やがれきも残っていました。前はきれいな家が並んでいたのに、どろをかぶったままの様子を見て、「津波は本当にひどい」と感じました。

そして一年前、私が五年生のとき、またお母さんとその友達の家に行きました。特に津波の話はしませんでしたが、元気で安心しました。そして、こわれた家は片付けられ広い空き地になっていました。少しずつ復興していることを感じましたが、元通りにはなっていません。

今、私は震災のことを思い出すことはあまりありません。電気も水道もあたりまえのように使っています。でも、その大切さを忘れてはいけないのだと改めて感じました。また、何よりも大切な命を守るために、これからも、ひなん訓練などに真剣に取り組んでいきたいと思います。

今はまだ復興のために何ができるか分かりませんが、自分にできることを毎日せいいっぱいがんばっていきたいと思います。

当たり前の日常が消えた日～三月十一日～

大崎市立宮沢小学校　六年　金田　わかな

当たり前の「日常」が一回の地震で壊れてしまう。それが災害の恐ろしさ。今でも三月十一日になるとテレビの特番がそれを伝えている。その当時小学校一年生だった私にとって、その報道を見ることでもう一度新たな気持ちで東日本大震災を体験している感じがある。

その日地震があった時は晴れていた。友達と帰ろうと手をつないで校門に向かおうとしたとき、それが起こった。二人で地面にうつぶせになり、先生から「校庭の中央に集まれ！」といわれるまでの時間は長かった。その後の慌ただしさの中で、友達はずっと泣いていた。でも自分が泣いていたのかどうかは覚えていない。でも、きっと恐怖のため泣いていたのかもしれない。

幸い家と家族は無事だった。ちょうどその日は父の誕生日、次の日は兄の誕生日で本当ならば、今家族でケーキを囲んで楽しい会話をしているはずなのに…。昨年まではそれが当たり前の日常でずっとそれが続くと思っていたのに。現実は、どうだろう。暖房のない中で、どの部屋も物が散乱して寝ることができそうな部屋は一つだけなので、そこで皆で寝た。寒くて心細くて歯ががちがち鳴って、なかなか眠ることはできなかった。

次の日お父さんが発電機を準備して、電気を起こし、テレビを見ることができた。その映像を見て驚いた。これが宮城県なのだろうか？私が住んでいる所に起こっていることなのだろうか？黒々とした海水が建物を、人を飲みこんでいくのが映っていた。

アナウンサーがずっと何か話していたが私の耳には何も入ってこなかった。聞くことができなかった。ただ「海には近づかないで下さい」そのテロップだけが目に焼き付いていた。この災害で失ったものは計り知れない。命も物も家も何もかも失った人が大勢いる。あの津波で思い出も当たり前の「日常」も無くなってしまった。

復興はまだまだ進んでいない。けれども私の回りには当たり前の「日常」が戻ってきている。そして世の中はどうだろう。ニュースでは殺人事件が毎日当たり前のように報道されている。「むかついたから殺した」「気に入らないから殺した」そんな理由で人が殺されている。人の命はガラスだと思う。とても割れやすいガラス。刃物で叩いたり殴ったり刺したりしたらすぐ壊れてしまう。三月十一日にはたくさんの人の命が割れてしまった。割れてしまった人たちの日常はもう戻ってこない。私たちができること、それは命を大切にして当たり前の「日常」を送ることができることの幸せを感じながら一日一日を大切に生きていくことだと思う。私はこの日常をずっと大切にしていきたい。そして、けんめいに生きていきたい。

東日本大震災を振り返って

大崎市立上野目小学校　六年　笠原　拓人

ぼくは、あの時のおそろしさを絶対に忘れない。二〇一一年三月十一日に起こった、あの悲劇を。

ぼくはその時、まだ一年生だった。学校が終わって、学校の近くの公民館で本を読んでいた。その時急に、地震が起きた。学童の先生方が

「机にもぐれ。」

と大声でさけんでいた。みんなは、一斉にもぐった。そしたら、今度はもっと大きい地震がやって来た。本だなが倒れそうになった。先生は

「急いで外に出ろ。」

とさけんでいた。外に出ると泣き出す人もいた。ぼくも泣きそうになったが、頑張ってこらえた。だが心の中は、不安な気持ちでいっぱいだった。お父さんとお母さんに会えるのだろうか。お父さんやお母さんは、帰って来るのだろうか。そんな気持ちで一杯の時に、おじいちゃんが迎えに来てくれた。ぼくは、ほっと安心した。家に帰ってラジオから聞こえてくる声に、ぼくは、一しゅん耳をうたがった。ラジオから、川のはんらんとか、津波の被害などが聞こえてきた。怖かった。ものすごく心配になってきた。お父さんやお母さんはまだ帰ってこない。

その日の夜は、幸いおばあちゃんがカレーライスを作ってくれて、おいしいご飯が食べられた。他の人たちは、電気もガスも止まりぼくたちのようにご飯も食べられなかったそうだ。その日は結局、お父さんとお母さんは帰ってこなかった。でも、次の日の朝に起きたら、お父さんとお母さんがいて、すごくうれしかった。そして、ようやく安心した。

震災から五年を迎えようとしている今、まだ被災している所がある。被災した時よりは良くなってきているけれど、復興していない所も、まだまだたくさんある。仮設住宅に住んでいる人もまだいる。被害が大きかった石巻の人の中には、まだ普通に生活できていない人たちもたくさんいる。

今のぼくにできることは少ないけれど、ぎ援金を送ったり、ボランティアなどに率先して参加したり、これからできることをしていきたい。そして、一分一秒でもいいから、はやく元通りになってほしいと思う。

「震災から五年目を迎えた自分」

加美町立中新田小学校　六年　工藤　美佑

五年前、私はまだ小学校一年生でした。

三月十一日、東日本大震災が起きました。今までにない激しいゆれを感じました。私はそのときに日直だったので、教たくの中に入りました。教室では、たなから物が落ちたり押さえていないと動いてしまう机があったりしていて、心の中は、恐怖でしかありませんでした。何分かしてゆれがおさまると、先生の指示で校庭へ出ました。外はとても寒かったのを覚えています。その日は、両親が仕事だったので、私は、祖父母のもとへ帰ることになっていました。すると、友達のお父さんが車で送ってくれるというので、乗せてもらいました。私は、被害が大きかったらどうしようと、不安でいっぱいでした。

祖父母の家に着きました。台所の物が落ちて、その破片が散らばっていましたが、被害はあまりありませんでした。けれども、この日から電気が使えなくなってしまいました。私の家はオール電化だったので、電気が回復するまで、祖父母の家に泊まることになりました。ガスや水は使えたのですが、やはり電気の使えない生活は、これまでにない苦労を味わいました。しかし、電気が使えない分、家族との会話が増え、それは楽しいなと思いました。

そこから数日が経つと、新聞が配達されるようになりました。それで知ったのが、津波です。地震のゆれでできる津波が沿岸部をおそったのです。その津波により、宮城県で九千五百人の方が亡くなっており、千二百人以上の方々も行方不明になっているのです。この記事を見て、同じ宮城県でもこれほど被害が違うものかと驚きました。亡くなった方のほかにも、親が津波にのまれて一人になってしまった子ども、家が流されて仮設住宅で過ごす人などが多くいたことが分かりました。

このような大変な中でも、立ち直ろうとする人がたくさんいたと聞きました。多くの人が亡くなった中で、立ち直ろうとする決心を一人でするのはとても心細いのではなかったかと思います。でも、立ち直ろうという決心ができたのは、多くの人に支えられているからだと思います。私も地震があったときは、すごくこわかったのですが、近くには友達や家族がいたからこそ安心できたのだと思います。

震災から五年が過ぎようとしています。あの地震を経験した私は、人と人との関わりを大事にしていくとともに、これまでは私がみんなに支えられてきたので、次は支えてあげられるようになっていきます。

五年を迎えた私

涌谷町立涌谷第一小学校　六年　平田　ゆり

私は、その時、そろばん教室の二階にいました。

一年生の私でも、今まで経験したことのない大きな地震だということが、すぐに分かりました。机の下にもぐったものの、あまりのゆれに、机どうしが音を立ててぶつかり合うほどでした。（どうしたらいいんだろう。）私は、泣きたいのをじっと我まんしていました。先生達が通路を確保したり、重たいテレビを押さえたりしている様子を見ていたとき、父が到着しました。先生が父に言いました。

「ゆなちゃんを送っていってもらえますか。」

「学校に行った方がいいですね。」

父は、ゆなちゃんの家のとなりにある建物が倒れそうだということを、教室に向かう途中に見ていたのでした。

父と私と友達は、しっかりと手を結び合い学校を目指しました。たどり着いた校庭は、泣き声がうずまいていました。校庭全体が怖さと寒さで震えていました。避難の輪の中から見つけた姉の顔。それまで我まんしていた涙が、どっとあふれてきました。

大泣きする姉と私は、父と家に戻りました。三階建てのビルが電柱とともに倒れている光景に、また衝撃を受けました。私達姉妹の通学路、何よりも、ちょうどその場所を通過する時刻。生きた心地がしなかった、と父が話してくれました。

安心できるはずの家は、見たこともない散らかりよう、電気も水道もだめでした。家族が寝泊まりできる車で過ごすことになりました。大きな余震がきても、すぐに安全な場所へ移動できるように、と父は考えていたようです。食事は、食堂を営む祖父母が作ってくれたおにぎりが主食になりました。私達と植物を愛する優しく、落ち着いた二人も、この大地震には、動ようを隠せないようでした。しかし、ガスを使える炊飯器でおにぎりをたくさん作り、近所の方々に配り始めたのでした。特に心に残っているのは、コンビニにカレーを届けにいったときのことです。できたてのカレーを持ち、喜んでくれたお客さんがいたのです。（久しぶりのカレーだったんだなあ。）改めて、食べ物は大切なんだと実感した瞬間でした。

あの日から五年がたとうとしています。本当の怖さが分かってきたように思います。ラジオから聞こえてきた「津波」という言葉。後に、雄勝をたずね、自分の目で確認してきました。建物の上に大型バスが乗っているという有り得ない光景、車の窓を閉めていても入り込んできた強烈なにおいは、今でも忘れられません。

一年生では分からなかったことが、今なら分かります。多くの人々の尊い生命が失われたこと、行方不明の方々の存在。私達と同年代の友達の無念さ。その人達の分まで、精いっぱい生きていきたいと思っています。

東日本大震災について考える

涌谷町立小里小学校　六年　大崎　友愛

私は、小学校一年生の時に教室で東日本大震災を体験しました。私はその時のことをはっきりと覚えています。私は、お母さんと弟がおむかえに来ていたので、帰ろうと思ってランドセルをせおおうとしたら地震がきました。私は、ランドセルを投げて机の下にもぐりました。机の下にもぐったときはそこまで強くなかったけれどどんどん強くなって、机がロッカーのほうに寄っていきました。地震がおさまってから校庭ににげました。私は、上ぐつをはいていなかったので、くつ下に雪のとけた水がしみてきてとても冷たかったです。

お母さんと弟と家に帰ると、居間の写真立てのガラスが割れて散らかっていました。ハウスにおじいちゃんがいて、おじいちゃんと近所の人が

「おいで」

と言ってくれたのでハウスにはいりました。とても温かかったです。しばらくするとお父さんが帰ってきました。家に入れるくらいまでガラスが片付くと、楓ちゃんと、そのお母さんとお父さんがきました。それから、電気がつくようになって水がもどってくるまで楓ちゃんの家族と私の家族と一緒に私の家にいました。その時つまらなかったので明るいうちはなぞなぞ遊びをしたりつくえの下に川の字になってもぐる練習をしたりしました。暗くなってからは、フラフープでどっちが多く回せるかを競ったり、お話をしたりしていました。他のことはよく覚えていません。

後に、東日本大震災がとっても大きな地震で大きな津波がきてたくさんの人が命を落としたと知りました。地震や津波などの災害をなくすことはできませんが、防災をしていればその災害による被害を小さくすることができるということを五年生の総合で学びました。

私は、災害があったときのためにふだんから物を備えておくことが大切だと思います。

その中でも食べ物や情報を手に入れるための道具、かい中電灯や電池が必要だと思います。なぜかというと、生活に食べ物は欠かせません。それに停電になったとき、かい中電灯など照らすものがないと、夜暗くなってからまっ暗で大変だからです。情報を手に入れるにしてもテレビのニュースが見れないので、ラジオなどが必要だからです。そしてなぜ電池が必要かというと、東日本大震災のとき、電池が足りなくて困ったからです。そして私が一番大切だと思うことは、家族と、どうやって連絡を取るか、家族とはぐれてしまったときにどうするか、話し合っておくことです。決めておかないと家族がどこにいてどうなっているのか分からないのでとても大事なことだと思います。

私は、東日本大震災の事を次の世代に伝えて自分も忘れないでいたいです。そして自分の事は自分で守れるようにしたいです。

負けないよ

美里町立不動堂小学校　六年　大場　さくら

「津波だー！二階に上がれー！」

二〇一一年三月十一日。私が住んでいた野蒜小学校の体育館はまるで大きな被害を受けました。避難していた野蒜小学校の体育館はまるで大きな洗濯機のように真っ黒な水が人々をのみこんでいきました。外を見ると、大好きな街は真っ黒な海に変わっていました。怖くて、私はただぼう然と立っていることしかできませんでした。気が付くと、皆から表情が無くなっていました。あの日は笑顔も津波がさらっていったみたいでした。犠牲者の中には、家族や友人も入っていました。とても悲しくて、自分でもどうしたらいいのかしばらくの間分かりませんでした。

家は全壊して、引っこすことになりました。お母さんやお父さんも辛いのに、私の前ではいつも笑顔で引っこし先を必死に探してくれました。

それから二回転校しました。引っこし先では何もかもいつもとは違いました。いつもと違う家で、いつもと違う学校で、いつもと違う友達でした。環境の変化についていけず泣いていました。

でも、家族、ボランティアの人たちや支援物資をくれた人たち、沢山の人たちの応援で前向きになることが出来ました。「大丈夫。」「頑張ろう。」全国の皆さんの気持ちに支えられました。

震災から五年経ち、経験を積んでいく中で気付いたことが沢山ありました。まず、私はいつも誰かの気持ちに支えられていて、私も誰かを支えている、ということです。私達は一人では生きられないということを強く実感しました。また、家があって、家族がいて、友達がいる、ということは今まで当たり前のことだと思っていました。でも、それはとても難しくて幸せなことなんだって思いました。いつもの毎日は幸せだったことに気付きました。もし、震災を経験しなかったらこの幸せには気付かなかったかもしれません。震災で悲しいことも辛いこともいっぱいありました。でも、その分幸せもいっぱいあるのだと気付きました。

だから、将来私は東松島を支える人になりたいです。東松島市役所の職員になって、復興に関わる仕事をしたいです。そして、東松島の人を笑顔にしたいです。

東松島は一歩ずつ復興に向かって進んでいます。新しい野蒜駅ができました。その近くには新しい街ができるそうです。

いつか、東松島の人たちの笑顔が戻ってきた時、東松島は復興したと言えるんだと思います。それは、きっととても難しいことです。

でも、私は絶対に夢を諦めません。辛くて悲しくても負けないです。だって、どうしようもないくらい辛くて悲しかったあの日をのりこえることができたんですから。

震災から学んだこと

栗原市立築館小学校　五年　髙根　唯斗

東日本大震災が起きたのは、ぼくがまだようち園の時でした。いつものように、ようち園から帰ってきて、家でテレビを見ていた時、突然、「ゴォーッ」という大きな音とともに、今まで経験したことのないとても激しいゆれが来ました。何が起きたのかも分からないまま、ぼくはお父さんに抱きかかえられ、外へひなんしました。外に出た後も、しばらくゆれが続いていました。地震がおさまったころ、家の中を見ると、全部がめちゃくちゃになっていて、ぼくはすごく怖くなりました。何日かは家に入れないほど余震が続き、車でねた事もありました。

家に入れるようになってからは、電気の代わりにろうそくを立て、ご飯はガスコンロとなべで作りました。電気だけでなく、水道も使えなかったので、給水所に並んで水をもらって、その水を使いました。おばあちゃんが上手に火の加減を見ながら、ガスで米を炊いていました。その時、ぼくは生まれて初めておこげのついたご飯を食べました。そのおこげのご飯はすごくおいしくて、一生忘れられない味になりました。おかずは、いつもなら、スーパーなどに行けばたいていの物を買うことができました。でも、この時はそうはいきませんでした。どの店も片付けに追われ、自分達の生活もままならないので、商売どころではありませんでした。そこで、市役所でやっていた炊き出しの所へ行き、配っていたおかずを並んでもらいました。ぼくは、おかずを作ってくれた人たちや市役所に人たちに、今でも感謝しています。この経験があったので、今、どんな時でもおかずがあるということをありがたく思い、嫌いな物でも全部食べるようになりました。東日本大震災は、ぼくにとっては大切なことを教えてくれたと思っています。それまではあまり思ったことのなかったご飯やおかずの良さと大切さを、この時初めて感じ、今も忘れていません。

また、震災から五年が経ち、この五年を振り返ってみると、あの震災が心を成長させるきっかけともなっていたことに気付きました。震災直後、家の中に物がめちゃくちゃに落ちた後、家族みんなで分担してそうじをしました。家族で助け合うことや、家族を思うことができるようになった気がします。三月十一日の数週間後、寝ていたぼくをゆさぶるように、また大きな地震が来ました。その時に第一に考えたのは、（みんなは大丈夫なのか。）ということでした。その後、家族のみんなが助かっていて、本当に安心しました。家族と支え合えること、家族がいつもそばにいてくれることが幸せなのだと感じました。

あのころの生活は、本当に大変でした。しかし、家族の温かさや食べ物のありがたさを学んだ、ぼくにとって大切な生活です。

希望の音をとどけたい

石巻市立大谷地小学校　五年　千葉　彩乃

今年で東日本大震災から五年がたちました。私は、今でも、テレビや新聞、本で震災のことを見ると思い出します。私が、震災を経験したのは小学校に入学する一ヶ月前くらいのことです。

私はまだ、六才で地震がおきたときはこたつにもぐりました。でも、地震はおさまらず一分間くらいつづきました。地震がおさまると、私は地震のおそろしさに、こたつから出てきたときは泣いていました。それから地いきの人たちの協力によって水や食料、お風呂にも入ることができました。でも、電気などは復旧せず新聞がとどくたびにお母さんに、

「今日はテレビつくの。」

と言っていたのを思い出します。今思うと、日常で不自由なく使っているものが使えなくなるのはすごく大変だと実感しました。

私は、震災から五年がたち、六才から十一才になり五年生です。今、私が新聞を見るときに、必ず確認するところがあります。震災で亡くなった人の数や、今行方不明の人の数です。私は、新聞をたまにしか読まないけれど、すごく多い数でした。私の家族は亡くなった人はいないけれど、津波で友達や知り合いが亡くなりました。地震や津波は人の命や動物の命をうばってしまう、おそろしいものだけど、大地震の経験で命の尊さの大切さを心と体で実感しました。そして、亡くなった人のぶんも今ある命を大切にしていかなければと思いました。

私には将来の夢があります。それは、音楽の先生になることです。私はピアノを習っていて音楽が大好きです。これまでは、夢がばらばらでした。でも、震災があって音楽の先生になりたいと強く思うようになりました。私は、テレビで高校生が震災によって、楽器を流されたりして、練習ができなくなった人たちを見ました。もし、それが私だったら、大好きな音楽ができなくなり、心の支えが、うばわれてしまったような、とても悲しい気持ちになったと思います。私が大人になって、今から生まれてくる子どもたちに、音楽のことを教え、そして何よりも東日本大震災の記憶とその中でも、あきらめずに努力した人たちがいたことを次の世代に伝えていきたいです。そして、私が音楽の先生になりたい理由がもう一つあります。震災で希望を失った人を元気づけてあげたいからです。今、五年がたっても、震災のえいきょうで、希望を失った人がいると思います。私は音楽の先生として、生徒と一緒に音楽の力でみんなを笑顔にさせてあげたいです。

震災から、ふつうに生活できることが、どれほど幸せかということを学びました。ふつうに学校に通えること、ふつうに家族と生活できること、そんな毎日を大切に、そして自分の命も、みんなの命も大切に、これからも元気に私らしくがんばっていきます。

子どもまちづくりクラブ

石巻市立蛇田小学校　六年　千葉　蓮

二〇一一年三月十一日。ぼくは東日本大震災を経験しました。小学一年生だったぼくは、あの時ただただ怖さと不安でいっぱいだったことが忘れられません。震災後、町が復興していく様子を目にし、「子どもまちづくりクラブ」の存在があることを知ると、その活動内容に興味がわき、自分も何か復興に向けてよりよいまちづくりができないかと考えるようになりました。

ぼくは、今年の春からまちづくりクラブのメンバーに加わりました。メンバーとしてのぼくの最初の活動となったのは、震災を風化させないためのモニュメントの作成です。このモニュメントには、メンバーの他にも石巻市内のたくさんの子どもたちのメッセージがつまっています。モニュメントとしてたくさんの人の目に触れ、利用してもらえるようにとベンチ型にしました。このモニュメントを作成して、ぼくは少しうすれていた地震当時の記憶がよみがえりました。嫌な記憶もありますが、多くの人たちがこのモニュメントを見る度に、あの震災のことを忘れてはいけないんだと考えるきっかけとなってほしいと思います。

この夏ぼくは大きな活動に参加してきました。それは、東京で行われたリーダーツアーです。このツアーの一番の目的は、復興庁を訪問し、東北の子どもたちの声を提言すること、復興大臣に子どもたちの目線で見て考えた意見を直接訴えることです。この東北の子どもたちの意見に、復興大臣は前向きな回答と力強いエールで応援してくれました。このツアーを通して、ぼくは自分の考えを誠実に丁寧にしっかりと伝えれば、相手からも同じように真剣な考えが返ってくるということを感じました。そして、相手の意見を尊重できるようになったとき、違った視点で物事が見えるようになるということを学びました。ツアーの前と後の自分では、物事の見方が変わり、様々な視点で考えることができるようになったと思います。本当にたくさんの学びと気付きがありました。

ぼくは、これからも積極的に活動に参加し、たくさんの人たちに自分たちの思いや考えを伝えていきたいと思っています。そして、未来の石巻を担うぼくたち子どもたちが、もっと復興に関して興味をもち、子どもなりに社会参加できるような環境が増えてくればいいなと考えています。あの日の寒さ、人の温かさ、思いやり。恐怖や辛さ、命の大切さを忘れてはいけません。そして、それらに対して、感謝の気持ちをもち、これからもよりよいまちづくりのためにぼくは活動を続けていきたいと思います。ぼくの生まれた町、大好きな町が再び元気を取り戻すように。

支えてくれた人にありがとう

石巻市立開北小学校　六年　伊東　知華

私は、東日本大震災が起きた時、湊第二小学校の一年生でした。今は、開北小学校に通っているので、あの恐ろしい経験をして、学校を転校しています。

地震が起きた時、私は五人の友達と家に帰ろうと小学校を後にした直後でした。湊第二小学校は、道路一本をはさんで湊中学校があり、その中学校の門の前で大きな揺れを感じ、私たち六人は、道路にうずくまって泣いていました。それを校舎にいた中学生が助けに来てくれたのです。まともに歩けない私たちを中学生のお兄さん、お姉さんに抱きかかえられたりおんぶされたりして体育館にひ難し、その後、小学校の担任の先生が迎えに来てくれました。私は、ただただこわくて、体がふるえ、泣いてばかりいました。

母や父、三人の兄、姉、弟とはすぐに会えましたが、祖父と会うには時間がかかりました。

湊第二小学校に三日いて、祖母がいる鹿又に五、六時間かけて歩いていき、それからしばらく鹿又で生活しました。

家が借りられることになり、開北小学校に転校すると、私は、地震にびん感になっていました。少しでも揺れると耳をふさいで家中を走りまわったり、教室でなみだがとまらなくなってしまいました。心の中で「落ち着け、落ち着け」と思うのですが、だめでした。

でも、そんな私を家族が支えてくれました。走りまわってしまう私に、一緒に深呼吸をしてくれたのが母でした。父も兄弟たちもいつも笑顔で楽しい話しをしてくれました。

「大丈夫。」

と話してくれました。

学校では、担任の先生がカウンセリングを受けるようにしてくれました。カウンセラーさんに相談に乗ってもらったり、折り紙で遊んだりして心の落ち着く時間を作ってくださり、心の落ち着け方を覚えていきました。

私の心の安定には、新しい友だちが力をかしてくれました。

開北小学校に転校した時、友だちができるかが心配で学校に行きたくないと思いましたが、一人で座っている私に、優しく声をかけてくれる友だちがいました。地震などで落ち着かなくなる私に、背中をさすってくれたり

「大丈夫だよ。」

と笑顔で伝えてくれる友だちがいました。泣いていると一緒になみだを流してくれることもありました。

私は、今、とても元気になりました。多少の揺れもしっかり受け止められます。

家族、先生、カウンセラーさん、そして、何よりも大事な友だちに支えてもらい、私は強くなりました。もしかすると震災が私を成長させてくれたのかもしれません。私を守ってくれた中学生のお兄さん、お姉さんの勇気を今かみしめています。会いたいです。

震災を乗り越えて

石巻市立向陽小学校　六年　三浦　虎次郎

（もう一度あのようなことがあったら……。）

少しでも安全な地域へ引っ越すことが決まり、ぼくは石巻市立湊小学校から石巻市立向陽小学校へ転校しました。

三月十一日、東日本大震災。一年生のぼくは、児童クラブに向かって歩いていました。突然のものすごいゆれに立っていられず、そばにあった消火栓の表示にしがみつきました。何がなんだか分かりませんでした。道路は混雑し、車から降りる人もいました。

ぼくは、児童クラブの先生と一緒に学校にひなんしました。絶対に来てくれると信じて母を待ち、その姿を見つけたときにはとてもうれしくて、とても安心したことを覚えています。

津波の到達は、それから約五分後でした。どんどん水がたまり渦を巻いていきます。津波に飲み込まれた一人の若い人が、近くの家の屋根につかまることができたとき、校舎にいたみんなから拍手がわきおこりました。

雪が降り出し、夜は最悪でした。学校にあった体育着などを体にかけ、母と寄りそってすわりながら寒さにたえました。

朝になると波は引いていました。暖かい朝でした。祖父が食料をもって来てくれました。そして、同じマンションに住む友達家族と一緒に家に帰ることになりました。

道にはヘドロがたまり、家具や自動車が積み重なっていました。一年生のぼくの足で二十分の道のりを、一時間かけて帰りました。

家はマンションの七階なので、無事でした。帰ってくることができてほっとしました。でも、飼っている金魚が水槽から飛び出して死んでいたのを見てショックを受けました。

クラスの友達の家族がみんな亡くなって、その友達が一人になってしまったということを聞いたときには、もっとショックでした。ぼくは、その子を絶対に守ろうと思いました。

このときぼくは、家族を失う悲しみを想像し、命の大切さについて考えた気がします。

今年、ぼくは久しぶりに湊小学校の友達の顔が見たくなって、湊小学校の運動会に行ってみました。みんなの元気な様子を見ていたら、とてもなつかしくてうれしくなりました。

「虎次郎君、ＰＴＡの玉入れに出てみない。」

ぼくのことを知っている先生にさそわれ、一般の種目に参加させてもらいました。少しはずかしかったけれど、ぼくも元気だということを見てもらうことができました。

湊小学校に戻りたい、と思うことがあります。でも、そんなときは、またいつか湊の人たちとお互いに笑顔で会えるようにがんばろうと思うようにしています。

今、ぼくは好きなサッカーに打ち込んでいます。食べたいものを食べることができます。これらのふつうに思えることに感謝し、一日一日を大切に生きていきます。

震災から五年目をむかえて

石巻市立渡波小学校　六年　志摩　なおみ

二〇一五年十一月、東日本大震災から五年が過ぎようとしています。私は、今、六年生となりました。今、渡波の町は、建物が増えコンビニ、スーパーなども出来ています。まるで、大震災がなかったかのように、昔の渡波にもどったように感じます。友達と一緒に遊んだり、おもしろい話の時に笑い合ったり家族と出かけたり、とても今が楽しいです。

私は、東日本大震災を経験して、改めてたくさんの人に感謝したいと思います。

理由は四つあります。

一つ目は、私が避難した山おくの幼稚園です。そこには、びっくりするほどの多くの人達が、避難していました。

私は、父母と一緒にずっと外が安全になるまで、幼稚園の中にいました。ずっと待っていると、なんだかおなかがすき、「ぐぅ〜。」となりました。その時は、はずかしさで顔が赤くなり、下をむいていました。

でも、それを気にかけてくれた私のとなりにいる女の人が私にパンを分けてくれました。その女の人にも子供がいたのに、なんだか申し訳ない気持ちになりました。でも、その女の人が

「気にしなくてもいいんだよ。」

と言ってくれたので、とてもうれしい気持ちになり、心があたたかくなりました。

数時間後、みんなに、おにぎりが配られました。何も味はありませんでしたが、食べるとうれしさと感謝で心が満たされていきました。

二つ目は、稲井小に仮設校舎を建てて下さった事です。最初は、不安でしたが、何不自由なく過ごす事ができました。稲井小の方々も、快く校庭や遊具をかしてくださったので、そのやさしい行動にも感謝しています。

三つ目は、私を支えて下さった人達です。全国から支援物資を下さり、勉強に必要な物、食べ物など十分すぎるほど助けていただきました。四年以上が過ぎた今でも続いている事がすごいと感じています。

最後にやっぱり家族です。私がさびしい時、こわい時に、ずっと支え、そばにいてくれたのは家族だからです。

父は、私のために多くのガレキがある渡波小に行き、ガレキの中からランドセルを見つけて来てくれました。一年生の思い出がつまったランドセルだったので、それを見た時、うれしさで涙があふれてきました。今でもそのランドセルは、私の宝物です。このように、たくさんの方々のおかげで今の私があり渡波があると思います。

私も、よりよい環境にするために進んでゴミを拾ったり、リサイクルなどをして、家族、友達、地域の方々と力を合わせて、協力してこれからもこの渡波を支えられるようにがんばっていきたいと思います。

災害ゼロの街づくりを目指して

石巻市立鹿又小学校　六年　佐藤　悠

私の住む石巻市は、東日本大震災により、じん大な被害を受けました。家は流され、多くの人が亡くなり、地域のコミュニティも途絶えるなど、私たちの心にも大きな爪あとを残しました。

震災から間もなく、五年になろうとしていますが、今でも多くの人が仮設住宅に住み、壊れたままの建物も見られます。そこで、私は、この石巻市が再び大きな被害に見舞われても、被害を最小限におさえ、「暮らしている人々が、安心して生活し続けることのできる石巻市」にしたいと考えました。「自分でできることは何か」「みんなでできることは何か」、考えたことを紹介したいと思います。

まず、自分でできることとして、「備える」ということを考えました。

あるデータから、「食料・飲料水の不足で生活ができないと感じられた時期」で一番だったのは、震災後四日から一週間が最も多く、その割合は、約四十パーセントでした。また、「震災後、備えたいと思ったものは何か」という問いに対しては、食料・飲料水が一番多く、続いて家庭内の連絡方法や発電機が続いています。

私の家では、震災後に家庭での備えをしています。例えば、懐中電灯や電池、毛布、食料や飲料水などの防災用品を用意しました。今までは用意していなかったのですが、今回のような震災を経験し、今後、困らないように家族で話し合って備えました。また、避難場所を確認したり、家族の連絡先を冷蔵庫にはったりするようになりました。

一人一人が備えていれば、災害が起きても不安にならずに過ごせるのではないでしょうか。

次に、みんなでできることとして二つのことを考えました。

一つ目は、「避難訓練」です。災害が起きても、学校や地域での訓練を重ねていくことでみんなの意識が高まり、身を守ることにつながるのではないかと思います。

二つ目は、「コミュニティの場を作る」ことです。身の安全だけでなく、心から安心して過ごすためには、人のつながりが重要だと思います。会話をしてお互いを知れば、声を掛け合ったり、助け合ったりできると思います。いざという時にも、みんなで協力し合えば、救われる人が多くなるのではないかと思います。

一人一人が災害の被害を減らせるように努力すれば、「安全・安心な街」になるのではないでしょうか。

私は、人々が安心して生活できるようになり、「災害が起こっても一人一人が命を守ることのできる街」つまり、「暮らしている人々が安心して生活し続けることのできる石巻市」になってほしいと思います。

東日本大震災で失った笑顔を取り戻し、全国で一番被害の少ない「被害ゼロの街、石巻市」をみんなで目指していきましょう。そして、一人一人ができることを、今、ここから始めていきましょう。

あれから何が変ったのか

石巻市立石巻小学校　六年　四野見　永遠

私は、本当は東日本大震災のことを思い出したくありません。あの時の怖かった気持ち、忘れられない光景があるからです。しかし、先生から作文のことを聞き、少しだけ自分の気持ちを書いてみようと思いました。

三月十一日、友達と一緒に帰っていた時に地震が起きました。急に周りがゆれ始め、私は立っているのも大変なくらいでした。何が起こったのか分からずにいると、近くの工場のおじさんが、

「大丈夫だよ。心配しなくていいよ。」

と言って落ち着かせてくれました。それから母が迎えに来て急いで避難しました。避難しようと思っても全く動かない車の中で、私はいつもと違う雰囲気がとても怖いと感じていました。そして、母から自分の家が津波に流されたことを聞いた時は、私はすぐに信じることができませんでした。

震災から約一ヵ月が過ぎ、学校に登校する日が来ました。私が通っていた門脇小学校は大変な被害にあったため、門脇中学校の校舎の一部を借りて、勉強することになりました。久しぶりに友達に会うことができうれしかったのですが、転校してしまった友達もいたので複雑な気持ちでした。学習用具が全く無かった私たちに、ノートや鉛筆などの支援物資がたくさん届きました。それらは、日本各地の方々からだけでなく、外国の方々からもメッセージと一緒に届きました。その時は本当にうれしくて、みんなも喜んでいました。

また、ボランティアの方々もたくさん来てくれました。私は避難所で生活していたので、その時に私たちの面倒を見てくれた一人のお兄さんのことは今でも覚えています。お互いに助け合いながら生活し、様々なことを一つ一つ乗り越えてきました。

震災からもうすぐ五年が経ちます。石巻はまだ復興したとは言えないと思います。私が以前住んでいた南浜町は、道路は作られていますが、家が無くなった所は震災後とあまり変わっていません。津波の被害にあった人が安心して暮らせる町にはなっていません。私は今でも小さな地震が起こると、また大きい地震が来るかもしれないと不安になりますし、震災の写真や映像を見ると思い出してしまうので見たくないのが正直な気持ちです。

それでも、同じようなことが起きてほしくないので、自分に何ができるか考えてみました。震災で亡くなった友達や逃げ遅れた方々がたくさんいたので、どんな時も自分の身を守る方法を考えるように伝えていきたいです。津波を経験した人しか分からないことなので、どんな場合も安心をせずに、すぐに避難してほしいです。何年かすれば、震災があったことを忘れてしまう人もいるかもしれませんが、今回経験したことが多くの人の役に立つ日が来ることを願って、これからも元気に生活していきます。

あたり前が大切

東松島市立矢本東小学校　六年　奥田　優愛

あの日のことを、私は昨日のことのように覚えている。きっと一生忘れずにいることになるだろう。

私は、一年生だった。クラスのみんなで、帰りの会をする直前。その時、感じたことのない揺れが、じわじわとみんなをおそった。当時の私は、地震や津波が何なのか、まったく分からなかった。それでも、先生が大きな声で

「机の下にもぐりなさい。」

とさけんでいたのを聞いて、あわてて走り、机へと向かった。床には落ちたランドセルや教科書などがあったが、私はそれをふみながら、必死に机の下に向かった。地震が長い時間続いた後、ゆれが弱くなってきた。すぐに校庭に出て、迎えに来てくれたお母さんと家に向かった。

その後、海から離れた所へ避難し、車の中で一夜を過ごした。その時、お父さんとは連絡がつかず、すごく不安な日が続いた。

それからの一ヵ月、避難場所を学校、武道館と移動しながら避難生活が続いた。その時のご飯は、パサパサの米や毎日同じパン。その後、支援が届くようになり、少しずつお店に売っているような弁当になってきた。すごくおいしかった。

仮設住宅ができ、私たちも避難所から移って住むようになった。仮設住宅に住むようになってからは、ご飯を自分たちで炊くようになり、やわらかいご飯が食べられるようになった。おいしい。私は、泣きそうになった。

あれから五年。今ではあたり前のことが、こんなにも大切だったことだったのかということを実感した。例えば、一人前のご飯やお風呂。あの時は、一家族で一パックしかなく一人二口ほどしか食べられなかったご飯。一週間入ることができず、ようやく入れた自衛隊のお風呂。それまであたり前と思っていたことができるようになって、本当に幸せだった。この時の気持ちを絶対に忘れずに、あたり前のことに感謝しながら生活している。

これからも、きっと自分の周りにあるあたり前の生活に慣れてしまうことがあると思うが、あの日のことを振り返りながら、感謝する気持ちを持ち続けていきたい。

もちろん、今の自分の命があることにも感謝しながら。